

第1章 ようこそ 男の子の世界へ

本書は、親となることを許されたすべての人を念頭において書きました。1人の男子または女子をこの世に生み出し、18年かけて一人前に育てるほどの特権は他にはありません。この仕事をやり遂げるには、日ごとにあらゆる知識と知恵と強い決意が必要です。特に男の子が1人でもいると、思春期まで生き延びさせることだけで大変かもしれません。

男の子はいたずらが大好き

親戚にジェフリーというかわいい4歳児がいますが、これが典型的な男の子です。

先週、両親と祖父母が居間でおしゃべりしていたとき、ジェフリーの姿がしばらく見えないことに気づき、部屋から部屋へと捜しましたがどうしても見つからない。大の大人が4人も近所をうろろろして「ジェフリー、ジェフリー！」と呼んでも、返事がなく影も形も見えない。つい悪い想像をしてしまう。誘拐されたのか。家の周りをさまよっているのか。万一ということはないか。みんなが、「神さま助けて！」と祈りながら近所を探し回りました。

15分ほどたったころ、だれかが「警察に届けよう」と言いました。ところが大人たちが家に戻ると、ジェフリーがどこから飛び出してきて、おじいちゃんに「ワッ！」と言ったのです。親たちがまっ青になって捜していた間、本人はベッドの下に隠れていたのです。子どもなりの冗談で、みんなが喜んでくれるとばかり思ったのに、逆に大人たちに叱られてショックを受けたようでした。

彼がとりわけ反抗的なのではありません。ただ男の子をしているだけです。念のために言いますが、男子は女子とはちがいます。かつてはそんなことを疑う人などだれもいませんでした。男はちがう、そして男の子が気まぐれだということは、直感で分かりました。「男の子なんてそんなものさ」と分け知り顔に言ったものです。

例外はあるものの、一般的に男子のほうが女子より育てにくいのです。扱いに苦労する女子もいるにはいますが、男子には特有の難しさがあります。個々の気質の違いはあるものの、男子は女子よりも自己主張が強く、大胆で興奮しやすい。ある父親は、息子を「馬力があるが、舵がないジェットエンジンだ」と表現しました。

ワシントン・タイムズ誌のポーラ・グレイ・ハンカー記者が、メグ・マッケンジーという母親の話の記事にしています。彼女の2人の息子も、まるで竜巻だと言うのです。

「下校したとたん、家の中を走り回るわ、木に登るわ、2階に駆け上がるわ、家に象でも入って来たみたいな音をたてるの。私が静かにさせようとすると、夫は、『男なんてそんなものだよ、慣れるしかない』だって」

記事は続きます。

「マッケンジー夫人は家で唯一の女性で、親の言うことを聞かずに危ないことばかりしたがる息子たちには気が狂いそうだという。

『片づけなさい!』ではだめなの。そうすると、申しわけ程度におもちゃを一つ二つどけて終わりと考えるから。だから、具体的に指示しなくちゃ』

男の子にはあいまいな言い方では通じず、明確に順序だてて言い聞かせなければならぬということをマッケンジー夫人は知った。

『私が洗濯物を階段の下に置いただけでは、そこを20回通り過ぎても、決して立ち止まって2階まで運ぼうとはしないのよ』(注一)

似たような話を聞いたことがありますか。5歳児の誕生日会を企画すれば、男子のすること

は女子と違うことがすぐ分かります。ケーキを投げたり、パンチ・ボウルの中に手を入れたり、女の子たちのゲームを邪魔する男子が必ず1人や2人はいます。なぜでしょう。ある人は、男の子のいたずら好きは家庭環境によると言います。もしそうなら、世界中どんな社会でも男子の方が攻撃的なのはなぜでしょう。また、2300年前にギリシャの哲学者プラトンが、「すべての動物の中で、人間の男の子が一番手におえない」（注2）と言ったのは一体なぜでしょう。

男の子を育てていてこわいのは、命にかかわると思えるようなことをする、それも幼い頃から平気ですることです。登れる所ならどこからでも飛び下りようとします。テンプルやお風呂、プールや階段、木や道路へ向かって、ペタペタと走っていく。食べもの以外なら何でも口に入れ、トイシで遊ぶのが好き。きゅうりや歯ブラシでピストルをつくり、引き出しや薬ビンやママのハンドバッグの中をかき回す。（かわいい手を口紅に持っていけないといいますがね。）

きげんの悪い犬にちよっかいを出し、子猫の耳をひっぱる。命を落とすようなはめにならないようにと、ママは絶えず目が離せません。石ころを投げ、火で遊び、ガラスを割るのおもしろく、兄弟姉妹や母親や先生や友だちをいらつかせるのが楽しい。大きくなると危険なものにひかれ、スケートボード、ロッククライミング、ハンググライダー、オートバイ、そしてマウンテンバイクにのめり込む。免許を取れば、酔っぱらった神風パイロットよろしく友だちと町を疾走す

る。無事に大人になることが不思議なくらいです。みながみな、とは言いませんが、男子はたいていそんな感じですよ。

カナダの心理学者バーバラ・モロンジエーロ博士が、危険行動についての男女のちがいを研究しました。それによれば、女性は自分に害があるかどうかをよく考え、少しでもその恐れがあれば身を引く傾向がありますが、男子は、危険を冒す価値があると判断すれば実行します。普通は友だち（結局は女の子）に認められることが、男子にとって価値あることなのです。モロンジエーロ博士は、屋根に登ってボールを取ろうとした息子を思いとどませようとした母親のことを書いています。

「落ちるかもしれないとは考えないの？」と聞く母親に、息子は「でも、落ちないかもしれないじゃないか」（注3）と答えたそうです。

リセット・ピーターソン氏による関連研究では、女子は男子より臆病なことが確かめられました。例えば、女子のほうが自転車に乗っていれば早くブレーキを踏み、痛みに対して否定的な反応をし、同じ過ちを二度と繰り返さないようにします。

一方、男子は怪我から学ぶのが遅い。傷を負ったのは、「運が悪かったから」（注4）と考える。「次はもうどううまくできるか」と。それに傷跡は、むしろ「カッコイイ」。

ドブソン家三代のエピソード

うちの息子のライアンも、子ども時代には次から次へと危険なことをしてかしました。6歳までには近くの救急病院の職員の多くと顔なじみでした。無理ありません、何度もお世話になったからです。

4歳の頃のある日、裏庭で目を閉じて走り回っていたとき、金属製の庭の装飾品に激突し、金属の棒が一本、右のまぶたの上に刺さり、骨が出てしまいました。裏口からよると家に入ってきたライアンは、もう血だらけ。シャーリーは今でも思い出すだけでぞっとするそうです。またまた救急病院に直行です。

それでも不幸中の幸いで、倒れる角度がほんの1、2センチずれていれば、棒が目刺さって脳まで傷を受けたかもしれません。ニアミスですんでよかったと、何度も神に感謝しました。

実を言うと、私も子ども時代には親をはらはらさせたものです。

10歳の頃、木から木へと渡るターザンの姿にうっとりしました。誰も「お前は、ああいうことはするなよ」とは言わなかったのです。ある日、梨の木に登って小枝にロープを結びました。そして隣の木に飛び移る構えをしたのです。

残念なことに、小さいとは言え致命的な考えがいをしていました。ロープが、枝から地面までの距離より長かったのです。空中に飛び出しつつ、「なにかおかしいな」とは思ったのです。ロープを握ったまま、4メートル下の地面に落ちました。息が止まったかと思いましたが、ずいぶん長いこと呼吸ができなくてね（実際には10秒そこいらでしょうが）。僕の人生は終わったかと思えました。歯を2本折り、頭の中では大きなゴングがガンガン響いていました。でも、その日の午後にはもう外を走り回っていました。

翌年のクリスマスに、化学実験セットをもらいました。爆発物や毒物はなかったのですが、私の手に入ったが最後、安全なものはない。何かあざやかな青色の薬品を試験管に入れて混ぜて、コルクの栓を強く締め、それからバーナーで熱し始めました。まもなく、いきなり爆発し、両親がペンキで真っ白に塗ったばかりの私の部屋は、美しい青色に彩られてしまい、その後数年はそのままでした。何を隠そう、これがあるままのドブソン家です。

私のいたずら好きは遺伝なのでしょうね。父もなかなかの腕白わんぱくだったそうです。父が少年の頃、友だちから「地面に埋まった長い廃水パイプに入れるかい」と聞かれて、「そんなの朝飯前だよ」とうけあいました。パイプの向こうの出口には針の先のような光が見えるだけでしたが、一寸刻みに這いずりました。案の定、真ん中で動けなくなってしまいました。必死にもぞもぞ手足を動

かしたが、もう二度と出られないかもと怖くなりました。たった1人で真っ暗なパイプの中にとり残され、たとえ大人が気づいても助けに来れず、パイプを全部掘り起こして見つけてもらわねばならない。結局、父はどうにかこうにか向こう側に行き着き、ホッと息をついたということでした。この類の話をもう一つ。

父と4人の兄弟は、皆ひと癖ありました。長男と次男は双子です。まだ3歳の頃、私の祖母が夕食のためにソラ豆をむいていました。祖父が出かける前に、子どもたちに聞こえる所で言いました。「子どもたちが、その豆を鼻の中に入れてたりしないようにナ！」

言わなければいいのにね。母親が背を向けるやいなや、子どもたちは鼻の穴に豆を詰め込んでしまい、取り出そうとしてもできずに彼女は放っておきました。数日立つと豆が芽を出した。小さな緑の芽が、鼻の穴から顔を出した。お医者さんに豆を一つ一つかき出してもらったそうです。それから数年後、5人兄弟は教会の高い塔を見上げて立っていました。1人が、「外側から登ってあの塔のてっぺんにさわって来れるやつはいるか？」と言ったからです。4人は猿のように登り始めました。父は「あの高さから落ちて命を失う者がいなかったのは、神の恵み以外の何ものでもない」と言いました。5人のいたずら小僧にとって、なんとすることもない日常生活の一コマです。

本書の目的

男の子たちを動かす力は何でしょう。どんな力が働いて、大事故になりかねないいたずらをさせるのでしょうか。男性の気質の何が、重力の法則にも逆らわせ、常識の声を無視させるのでしょうか。危険を好む男子の性質は実は生まれつきで、攻撃的な行動を刺激するホルモンの働きなのです。その複雑かつ強力な男性の性質については次章以下で扱います。男性が自分を、女性が男性を理解しようと思ったら、年に関わらず男の心理と生理を知ることがどうしても必要です。

私は、今の時代に男の子をしつかり育てようとしている親たちをぜひとも助けたいのです。今の社会は、家族に対し、ことに幼く弱い子どもたちに対してあまり親切ではありません。魅力的に見えて実は有害なメッセージが溢れています。映画、テレビ、音楽産業、「安全なセックス」教育、同性愛者運動、インターネット・ポルノ……。親は、四方八方から押し寄せる様々な悪影響に負けない子どもを育てるにはどうしたらいいか、という難題に直面します。

本書の目的は、親たちが男の子を守るのを助けること、つまり不道徳で危険な誘惑から彼らを守ることです。親は彼らを守るだけでなく、攻勢に出るべきです。男の子たちの幼く感じやすい

時期を最大限に生かして人格の土台を築くのです。短い20年そこそこのあいだに、未熟で気まぐれな男の子を、女性を大切にし結婚式で交わす誓いを守る大人、決断力のあるリーダー、勤勉な社会人、また男性として自信のある人間にしたいのです。

1世紀前の親たちは、この長期目標とその方法についてしっかりした考えを持っていました。そのうちのあるものは今も有効で本書でもおいおいふれていきますが、同時に発達心理と親子関係についての最新の研究結果も紹介します。

これらの学問的な知識から得られるヒントと、30年以上家庭問題に関わってきた私自身の経験の中から、男の子を持つ親たちに何らかの励ましと具体的な助言ができればと願っています。